

- 岡田英弘 1983 「東アジア大陸における民族」、橋本萬太郎編『民族の世界史 5：漢民族と中国社会』47-110 頁、東京：山川出版社。
- 加地伸行 1995 『儒教とは何か』、東京：中央公論社、中公新書。
- 小島麗逸 1997 『現代中国の経済』、東京：岩波書店、岩波新書。
- 舟蓮村 1988 「談農民的不平等」『社会』9期：10-13 頁、上海大學文學院。
- 秦兆雄 1995 「農村から都市への遠い道」、曾士才・西澤治彦・瀬川昌久編『アジア読本・中国』88-95 頁、東京：河出書房新社。
- 1998 「中国の都市農村二元構造論再考」『神戸外大論叢』第49巻4号：41-63 頁、神戸市外国語大学研究会。
- 2000 『南街現象』に関する一考察『日中社会学』8：145-168 頁、日中社会学研究会。
- 2005 『中国湖北農村の宗族・家族・婚姻』、東京：風響社。
- 2006 「中国人類学の独自性と可能性」、竹沢尚一郎編『世界の人類学』国立民族学博物館研究報告書 31-1：117-153 頁、大阪：国立民族学博物館。
- 中華人民共和国国家統計局編 2006 『中国統計年鑑』、北京：中国統計出版社。
- 中国研究所編 2006 『中国年鑑2006』、東京：創土社。
- 張玉林 1997 「国家と農民の関係からみた現代中国の戸籍制度」『中国研究月報』594：13-24 頁、東京：中国研究所。
- 陳桂棣・春桃（納村公子・相田雅美訳）2005 『中国農民調査』、東京：文藝春秋。
- 段偉菊 2004 「大樹底下同乗涼：『祖蔭下』重訪と西鎮人族群認同的変遷」『広西民族学院学报（哲学社会科学版）』(1)：39-45 頁。
- 21世紀中国総研編 2006 『中国情報ハンドブック』、東京：蒼蒼社。
- 聶莉莉 1994 「中国農民社会における儒教の影響の実態——東北地方の実地調査に基づいて」『国立民族学博物館研究報告』19(1)：61-94 頁、大阪：国立民族学博物館。
- 仁井田陸 1952 『中国の農村家族』、東京大学出版会。
- 費孝通 1948 「論師儒」費孝通・吳晗他『皇権と紳権』23-38 頁、学風出版社。
- 前田比呂子 1993 「中華人民共和国における『戸口』管理制度と人口移動」、『アジア経済』第34(2)：22-41 頁、東京：アジア経済研究所。
- 毛里和子 1984 「中国都市部の雇用問題」、高木誠一郎・石井明編『中国の政治と国際関係』257-280 頁、東京大学出版会。
- 李迎生 1993 「我国城郷二元社会格局的動態考察」『中国社会科学』2：113-126 頁、中国社会科学雑誌社。
- リーチ、E.（長島信弘訳）1985 『社会人類学案内』、東京：岩波書店（Leach, Edmund 1982 *Social Anthropology*. New York: Oxford University Press.）。
- 劉正愛 2006 『民族生成の歴史人類学——満洲・旗人・満族』、東京：風響社。
- 若林敬子 1996 『現代中国の人口問題と社会変動』、東京：新曜社。



●座長（瀬川）— ありがとうございます。

ただいまの秦先生のご報告は、「少数民族研究からみる南部中国社会」というタイトルのセッション

ンでのご発表としては、かなり違った角度から切り込んでいただきました。都市と農村から見た中国社会ですので、座長としては非常に狼狽する、いかにしてまとめるか、そういう危機感を覚える発表とも思えるのですが、民族の問題を相対的にとらえ直すという意味では非常に挑戦的で、かつ意欲的な視点を含むご報告だったと私は感じました。

すなわち民族というものは、それぞれの地域に住む人たちにとって、どれくらいのリアリティを持っているかということ、まず考えていなくてはならないということです。

中国の人たちはIDカードを持っていて、そこにいろいろな属性が書かれています。漢族であるとか、回族であるとか、苗族、白族であるという民族籍が書いてあって、同時に都市戸籍か、農村戸籍か、さらには男女のどちらであるとか、たしか宗教の欄もあって、たぶん現在のIDにも残っていると思います。本籍にあたるものも入っていますし、党籍も入っていたような気がしますが、そこは定かではありません。

ですから、地域社会のなかで暮らす生活者の視点から言いますと、何族であるかという民族籍とともに、農村戸籍であるか都市戸籍であるか、男であるか女であるか、党员であるか非党员であるかと、さまざまな属性を持っているわけで、民族というのはそのなかの一つにすぎません。場合によっては非常に大きな意味を持つこともありますが、年がら年中、一日中、それを気にして生活しているわけではないことは確かです。さまざまな属性のなかのあるものを、ある社会的な場面では強調したり、利用したり、ある場合には隠したりということがおこなわれているはずです。

そのなかで、われわれ人類学・民族学は、どうしても議論の対象として最初に民族、族籍の問題を取り上げてしまいます。文化人類学で言いますと、やはり男女のジェンダーの問題は研究対象です。しかし党籍とか都市農村の戸籍の問題については、われわれ文化人類学にとって、なかなか第一次的な研究対象とはなりがたく、そのように取り上げてこなかったという経緯があります。

学問間にはある程度分業というものが有りますから、何もかも文化人類学が引き受けてやるべきとは思いませんけれども、現実の地域社会に生きている人たちのリアリティに出発して研究していくことから言うと、はたして最初に「民族」ありきという入り方でいいのかと相対化するとらえ方が必要だということを、いまの秦先生のご発表の前半部分では提起されたと思います。

後半部分では、さらに民族研究と農村研究の共通点をとらえられまして、しよせん都市に住む知識人からの、弱者あるいはマージナルな存在へのまなざしに基づく研究にすぎないというご提起がありました。

植民地主義批判の文脈のなかで、文化人類学の研究対象と研究をする立場にある者とのあいだに横たわる、ある種の不均等な関係性については、さまざまに議論されてきましたが、そういう視点でとらえてみると、いままでの中国での人類学の研究は、都市知識人の視点からの研究を脱していないのではないのでしょうか。

ただいまの秦先生のご指摘は、主に中国本土で研究なさっている中国人の研究者に向けられたものであるのか、それよりも広く、われわれ日本で研究している者も含めて論じておられるのか、そこはちょっとうかがってみたいところですが、いずれにしても、これまでの中国人類学の根本にある一つの傾向のようなものをご指摘いただいたと思います。

ここからは、コメンテーターに名を連ねておられるお三方、曾先生、塚田先生、西澤先生の役割ではありますが、いまの秦先生のご提起を何らかのかたちで踏まえていただいて、少数民族研究の内側から論じるだけでなく、そういうテーマを持って研究すること自体にどういう意味があるか、外側から論じるような視点をどこかに添えていただきたいというのが、座長としての立場からのお

願いであります。

こういうことを踏まえながら、ご準備されてきたこともいろいろと含蓄があると思いますので、あとはご自由にコメントを頂戴できればと思います。

では最初に曾先生、お願いいたします。

●曾— 法政大学の曾です。私自身は、1990年代に貴州省の苗族を調査・研究しておりました。1995年の2月、旧暦の大みそかの日は、あとで私自身の報告に出てきます貴州省東南部の台江県の、町から歩いて15分ぐらいの苗族の村で過ごしていました。

ところが、折あしく夕方から停電になりまして、夜のゴールデンタイムというか、春節の、日本の位置付けで言う『紅白歌合戦』みたいなものが始まる時間になっても、村は停電のままなのです。そこは町に非常に近くて、町外れと村との距離はわずか50、60メートルです。そこには大理石工場がありまして、私が村でお世話になっている家の娘は、大理石工場のすぐ隣に住まいがありました。

するとその家族の若者たちはみんな、その番組を見にいこうと嫁いだ姉の家に行ってしまいました。苗族の村に残されたのは戸主の男性と私だけで、黙って二人で酒を酌み交わしながら、いろいろの明かりで一晩を過ごしたという状況です。

これは何かというと、町ではいち早く電気が復旧しましたが、わずか50メートル離れた苗族の村では、一晩中停電であったということです。秦さんは以前、「農村から都市への遠い道」にご自身のふるさとのことを書いておられますが、私はそのときに秦さんの実感を追体験したような気持ちになった記憶があります。

この例で言いますと、少数民族の村だから停電のままだったというよりも、秦さんが言われたように、まさに都市と農村のギャップと考えたほうが理解しやすいわけです。そういう意味では中国を見る視点として、今日秦さんが提出された都市と農村の二元構造という視点は非常に有効な分析枠であり、従来私たちが見過ごしがちであった視点であると言えます。

では、いつもこういう視点が有効なのかとなりますと、先ほど例として挙げられた白族の場合、たしかに少数民族ではありますが、漢文化との位置関係で言うと早くから多分に漢文化を摂取しています。まさにフランシス・シューが描いた『Under the Ancestors' Shadow』を、以前は誰も白族のものとは思わなかったわけで、かなり漢族と近いものがある例だと思えます。

では、すべての少数民族にこれが当てはまるかというと、必ずしもそうでもないということ、私はこれから申し上げたいのです。先ほどの秦さんの発表レジュメのなかに、例えば入学試験とか計画出産、あるいは火葬などにおいて、少数民族が優遇されていると指摘されていますけれども、これはまかり間違えば、マイノリティーに対するアファーマティブ・アクションを逆差別だと言う、マジョリティー側の言説にも通じる部分があるのではないかと思います。やはり実態としては、農村の少数民族と農村の漢民族とのあいだには、事実上かなりの格差が存在しているという点は指摘しなければいけないと思います。

先ほど、非識字者の話をされていましたが、中国1990年（国際識字年）の段階で、中国の総人口に占める非識字率は22パーセントです。ただし少数民族だけをとれば30パーセントを超えており、さらに少数民族の女性だけをとれば40パーセントを超えております。

私が1995年のお正月を過ごした村の話に戻りますけれども、その村では春節が過ぎるころになると、都市部の求人広告が壁に張られます。いわゆる出稼ぎ労働者の募集です。こういう場合の資格は最低限でも小学校卒業なのです。ところが、こういった農村部においては小学校すら卒業してい

ない児童が多く、そういう出稼ぎにすら応募できない実態があると思います。

もちろん、こういう状況は漢族の農村でもあると思いますが、先ほど言いましたように、実態としては非識字率の全国平均が 20 パーセントなのに対し、少数民族は 30 パーセントです。また農村と都市の格差ということでも、少数民族が多い西部地域に関しては、やはりそういうギャップが大きいというデータがあります。

ですから私の感想としては、都市と農村の二元構造というよりも、三元構造と言っていいでしょうか。都市と漢族農村、そして少数民族の農村。ただし、これは少数民族といえども、白族のような限りなく漢族農村と近い場合もあるし、そうでない場合もあるということは、テークノートしておかなければいけないと思います。

先ほどのご発表をうかがって、私としては、その視点が非常に有効に働く場合と、それが当てはまらない場合があるのではないかという点を指摘させていただきたいと思います。以上です。

●座長— 曾先生、ありがとうございました。

それでは引き続きコメンテーターのお二方目、塚田先生にお願いいたします。よろしく願いいたします。

●塚田— 国立民族学博物館の塚田と申します。

秦先生のご報告では都市と農村の二元構造に注目されて、民族の視点よりも都市対農村の視点が重要であると指摘されています。これは中国社会、さらには中国人類学の成り立ちを理解するうえで、たいへん重要な切り口だと思います。

ただし、先ほど曾先生もおっしゃいましたけれども、都市と農村の二元構造は、漢族と少数民族の違いとは必ずしも一致しないことに注意しなければなりません。

私は先ほど自己紹介で申しましたように歴史民族学的方法を用いて研究しております。フィールドは広西壮（チワン）族自治区ですので、自分のフィールドの事例に即して少しコメントさせていただきたいと思います。一つは、漢族と少数民族との連続性ということを申しあげたいと思います。もう一つは、都市民と農民とは、例えば居住地もそうですけれども、さまざまな点で歴史的な変遷が見られるのだという点を申しあげたいと思います。

広西壮族自治区には、「蔗園人」という集団があります。南寧から西に左江・右江という川があってその流域は民族地域ですが、そこに蔗園人という漢族のグループがあります。居住形態から申しますと、左江・右江の川沿いに「城市人」といって、祖先が広東から移住してきた広東語を話す人々が居住しています。その外側に蔗園人が、そしてさらにその外側に壮族が居住しております。この蔗園人や壮族は、おもに農村に居住しています。

蔗園人の伝承によりますと、彼らは宋代から明代の初期ぐらいにかけて来住します。来住のきっかけは、宋代に起きた儂智高の蜂起を鎮圧するためです。この移住伝承は蔗園人のほかに壮族のものにもあります。

蔗園人は、習俗のさまざまな面で壮族と共通しています。例えば「不落夫家」という婚姻習俗があります。これは以前『中国 21』6号（143～174 頁、1999 年）にも論文を書かせていただいたことがあるのですが、夫婦は婚礼後も互いの実家に別居して、女性が妊娠してから父方に移るという習俗で、この習俗を蔗園人も壮族も持っています。

ほかにも、例えば年中行事の際に、つき餅やおこわなど、さまざまなもち米食品をつくるのです

が、蔗園人はそういうものも好んでつくります。さまざまな面で壮族の影響を受けているのです。

しかし、蔗園人には漢族的な部分もあります。壮族は婿入り婚が非常に多いのですが、蔗園人は婿入り婚をしません。男子がいない場合には、自分の兄弟の子を養子にします。

もう一つ違うのは、壮族の場合、子どもが生まれますと満1カ月のお祝いに、母方の祖父を含む男性が大挙して来るのです。婚礼よりも子どもが生まれたあとのお祝いのほうが盛大になる傾向が見られるのですが、蔗園人の場合は実家から男性は来ません。そういう意味では漢族的です。漢族も多く地域では、子どもが生まれた祝賀儀礼に女性の実家からは女性しか来ないのです。

ただ、こういう習俗というのは、これが漢族でこれが少数民族とは必ずしも決めつけられない面がありまして、あくまでもこの地域において違うと言えるだけなのです。実際には、婿入り婚も別の地域では「客家」のところにあたりしますので、この地域ではないということです。

「蔗園」という名前の由来ですけれども、これは「甘蔗」、すなわちサトウキビ栽培をおこなう人々です。生業についても壮族の場合は水田に一元的に依存するモノカルチャーであり、蔗園人の場合はサトウキビ栽培や野菜など、さまざまな商品作物をつくる多角経営をしているという点に違いがあります。

ほかの地域でも似たような事例があると思いますが、この蔗園人は、漢族と非漢族をつなぐ中間的な位置にあると言えますし、漢族の多元性を示す事例の一つであるとも言えると思います。秦先生の報告では、農民と少数民族とが都市の周縁に居住することが示されていますが、漢族のなかでも習俗が少数民族に近い人々、しかも農村に住む人々も各地にいることが指摘されます。

このように漢族と少数民族は二つに分けられるのではなく連続していて、そのあいだには中間的な習俗を持つグループがいるという事実が、このセッションのみならず漢族と少数民族とのクロスオーバーというシンポジウム全体の趣旨を考えたときに、たいへん重要な問題点になるかと思えます。以上が第一点です。

それから、先ほど蔗園人が、宋代の儂智高の蜂起を鎮圧するために来たと自認しているということにふれましたが、それが事実だと仮定しますと、早期には彼らが都市市民であった可能性があります。西南中国の多くの地域で、中国の北方地域から来た遠征軍の軍人が早期の都市住民であり、清代以降、17世紀以降の新たな移民、とりわけ商人が都市に移住するにつれて、早期移民が農村部に広がって農民化していったということが言えます。例えば先ほどの蔗園人は、早く来た漢族が先に都市に住み着いて、あとから清代以降に来た城市人（広東人）に押し出されるかたちで農村に広がっていった可能性があります。

こうしたことから考えると、都市と農村の住民は伝統的に固定的であったのではなく流動的であり、歴史的な変遷が見られたということが指摘されると思います。ただ、秦先生の報告について言いますと、王朝の統治権力の出先機関が常に都市にあり続けたということは間違いではないと思います。

戸籍の面でも、都市と農村の戸籍は1958年以降固定されますけれども、それ以前に、例えば清代ですと民籍ですので、都市市民と農民は同等であるのです。しかも流動性があります。例えば先ほど申しあげたような、最初は軍人として入ってきて、そのまま農民化していく、あるいは逆に、もとは農民として移住してきた者が移住先で成功して土地を集積し、自分は都市の不在地主になっていく現象も見られます。こうした都市や農村の流動性が、歴史的に見られたということも考えなければならぬと思います。

二つの点を申しあげました。漢族と少数民族を二分するだけではなく、両者の間には連続性が見

られ、現在も続いているということ。また、歴史的に農村と都市とは、戸籍の面でも他の面でも、1958年以前においては明確に区別することは必ずしもできないということを申しあげました。

以上2点、簡単ですけれどもコメントといたします。

●座長— 塚田先生、ありがとうございました。

それでは3人目ですが、西澤先生のコメントをうかがって、そのあとでもう一度、秦先生にお答えいただくようにしたいと思います。西澤先生、よろしく願いいたします。

●西澤— 武蔵大学の西澤です。座長からのリクエストにお答えする前に、最初の一つ申しあげます。

曾さんが、「都市」と「漢族の農村」と「少数民族の農村」という三重構造になっていると言うお話は、面白い指摘だと思います。さらに塚田さんがお話しされた、漢族と少数民族の間には、いくつもの中間層があって連続体である、という指摘も、たしかに費孝通が「中華民族多元一体論」のなかで述べていることであり、そのとおりだと思います。

少数民族にもいろいろあって、私が研究している回族は都市と農民のどちらにもびたりと当てはまらない例です。もともとは都市の住民として陸路、あるいは海路、中国へ移住してきたわけですから、元代には優遇されていた回民も、その後、国内移住を繰り返すことによって農民化していった回族がいるのです。地域によって、回族のなかでも都市回族と農民回族との間に、ものすごく大きな差があると思います。これが一点です。

それから、秦さんのテーマに関してコメントさせていただきたいと思いますが、私自身も江蘇省の貧しいと言われている蘇北農村で調査をした経験から、都市と農村の格差は、身分制度に近いぐらいの別世界である、という認識を持っています。

これは私も中国で農村調査をして痛切に感じたことでして、特に1985年当時、外国人が農村に行きたい、農村調査をしたいと言うと、意図をよく理解してもらえなかったのです。「農民には文化などない」、「彼らに何を聞くのだ」と吐き捨てるように言われた経験があります。いや、そうではないのだ、ということを説明するのが非常に難しかったです。

秦さんも参考文献で挙げている『アジア読本・中国』のなかでも、彼自身が都市との格差についての一文を寄せてくれています。いまから思えば、秦さんの農村調査の一番おいしいところを惜しみなくいただいたな、という原稿だったと思うのですが、ある意味でこの問題が秦さんの原点になっているのかなと、いま話をうかがいながら思いました。

やはり、われわれ日本人は、研究者は別ですけれども、中国のことをよく知りません。特に農村のことを知らないですね。授業でも、必ず最初に「都市と農村の違いは何か」ということを話すようにしていますが、実際に中国の農民はそれほど日本に来ていないですから、彼らのことを知るのにはなかなか難しい。知っていてもせいぜい地方都市レベルで、地方都市もわかっていない人が多いです。だから県レベルとか、郷鎮レベルまで下りていくと、なおさらわかっていません。

昔、天安門事件の直後に慶応の地域研究センターでシンポジウムが開かれて、研究者やジャーナリストが集まりました。そこに某週刊誌の編集長がいて、「北京に駐在していたときに、私は地方の状況を知りたいと思って、地方はどうなっているか、早速上海に飛びました」と言ったところ、失笑がもれたことがありました。そういう意味では都市と農村の格差というのは、農村へ行ったことのない人にはなかなか理解できない世界であり、秦さんが農民出身ということから、声を大にし

て叫びたい気持ちは非常によくわかるのです。それが率直な感想です。

もう一つ、問題提起として、先ほども大伝統と小伝統との関係についてのお話がありましたけれども、なぜ農村と都市でこれだけ距離が開いてしまったのか、という問題について述べたいと思います。

一つには、土地改革によって郷紳層というか地主層というか、ある意味で地方文化の担い手だった人たちを、ことごとく消滅させてしまったことが挙げられます。例えば、文革のときに上から作付けを倍にしるとか、ブタを殺せとか指示されましたが、そんなことをやれば収穫がなくなるというのはわかるわけで、そんなばかな指示は地主がいれば拒否したと思うのです。政府の官僚は県城まで、県城から下はある程度の自治が任されていて、中間層としての地主階級が、ときには政府、ときには農民たちの立場に立って、クッション役を果たしていたと思うのです。なおかつ、彼らが地域文化の担い手だったと思うのですけれども、その層を壊滅させてしまったのが大きいと思います。

その結果、上からの指示が貫徹して、どのレベルでも上に対して反論できないようなシステムをつくりあげてしまったわけです。おまけに、村レベルまで政府系統と党系統の構造をつくりあげました。私は末端の農村に行ってみてびっくりした経験があります。それまで牧歌的な農村のイメージを持っていたのですが、もし外国人が申請をせずに農村調査に入ったら、その日のうちに県の公安へ通達がいて、公安が私の所にやってくるというシステムを感知したのです。これはすごいなと思いました。

ある意味、中国共産党は歴代王朝が成し得なかった末端までの支配、例えていうなら毛細血管というか、網の目のような支配構造をつくりあげたのです。これは非常に画期的なことであると思うのですが、デメリットもあまりに大きかったと思います。

都市と農村関係の格差をなくしていくためには、具体的にどうしたらいいかという問題がありますが、単に戸籍制度を廃止しただけでは都市に人口が流入して大混乱が起こると思うので、やはり中間層を育てていくという過渡的な措置も必要ではないかと思います。

農村の内部でも流動性があるし、都市の内部でも流動性があるけれども、都市と農村の間ではまだまだ民工がでる程度で、大きな流動性はありません。まだ境界があります。文革のときの身分制度は、いい階級、悪い階級と、ある種の固定されたシステムだったと思います。文革の後期に起こった「下克上」的な混乱は、それに対する反発が一因だと思います。そういう意味で私は、やはり縦のヒエラルキーの社会的流動性を確保したほうが、社会はより安定するという考えを持っています。

最後に農民調査の話が出ましたが、秦さんの民族誌『中国湖北農村の家族・宗族・婚姻』は、中国語に翻訳されても中国本土では発禁処分になるのではないかと危惧しています。で、最後に『中国農民調査』の話をされたのは、人類学者は農村を調査しているけれども、発禁処分になるような本を書いていないではないかというお叱りかもしれません。しかしそれはなかなか難しいところがあって、中国に入国できなくなってもいいから、いつかは自分の主張を書きたいという気持ちはありますけれども、現地で協力してくれた農民たちに迷惑がかかるといった問題も考えねばなりません。

いくつか話が飛びましたが、以上が私からのコメントです。

●座長― 西澤先生、ありがとうございました。

お三方それぞれの立場から、最初に申しあげた座長からのお願いも十二分にくんでコメントをいただきました。

曾先生からは、少数民族といっても多様な状況があるということ。そして相対的に見た場合には二元論ではなくて、少数民族の農民、漢族の農民、都市民という三重構造だというご意見でした。

塚田先生からは、少数民族と漢族のあいだの連続性ということで、蔗園人の例をお話いただきました。そして歴史的な観点から、かつては都市民だった人たちが農民になる、あるいはその逆という、都市民・農民間の流動性が見られます。現在の戸籍制度も、中華人民共和国の制度が伝わっていくなかでできあがっていて、それ以前の清朝のシステムでは「民」という同じ籍で括られていたということをお指摘いただきました。

西澤先生からは、少数民族といってもいろいろあって、都市の回族のような例もあるというご指摘もありましたし、都市・農村の距離が生じた大きな原因には、土地改革等による、かつての農村のエリート層であった郷紳層の喪失があるということが指摘されました。さらに秦さんがご報告のなかで提起された、都市・農村間のギャップを埋めるためにはどうしたらよいか、ということに関して言えば、新たな中間層が出てくる必要があるのではないかという、非常に重大なご提起があったと感じました。

いまのお三方のコメントを踏まえ、次に秦先生のほうからリプライ、あるいは直接的なリプライではなくて、それに触発されておっしゃることでもかまいませんが、お願いいたします。

●秦— 丁寧なコメントを頂き、ありがとうございます。

時間の制限で、発表の内容を十分申し上げませんでした。私は漢民族に限らず、少数民族も含むつもりで、都市と農村の二元構造を論じています。曾先生のご指摘の、少数民族の農民、漢族の農民、都市民という三重構造の視点が重要であると思います。但し、少数民族の農民も都市民も漢族の農民より優遇されているという視点からすれば、その三重構造は都市民、少数民族、漢族の農民という社会的な地位順位になると思います。

また、塚田先生が蔗園人の事例を取り上げて少数民族と漢族の間の連続性を指摘されましたが、その通りです。ご指摘を聞いて、私の問題意識がより明確になりました。レジュメの中で白族などを取り上げて、民族意識（アイデンティティ）の多様性・多重性・流動性・曖昧性などを論じましたが、これは少数民族と漢族の間の連続性を念頭に置いたものです。そして、都市民と農民の間の流動性が見られるというご指摘もその通りです。私は都市と農村の二元構造を論じる際には必ずしも相互の流動性を否定していません。どんな時代でも農村のエリートが様々なルートを通して農村から都市に吸い上げられているといえるでしょう。拙稿（1998）の中でも論述したように、解放後都市に住むようになった共産党の指導者達は殆どかつての農村出身者でしたし、また、毛沢東時代には多くの知識人や知識青年などが農村に下放されました。しかし、都市と農村とは基本的に二元構造にあり、その二元構造は「戸口制度」により明文化されるようになったと思います。

そして、最後の西澤先生のご指摘についてお答えします。私は都市と農村間のギャップを埋めることは、新たな中間層が出現したとしても難しいと思います。解放後、地主や郷紳などの中間層が打倒された代わりに、一部の貧しい農民が政治的な権力や社会的な権威を与えられ、基層幹部として新たな中間層になりました。しかしながら、彼らは社会的、経済的、政治的な資源を、自分の家族や親族関係者などに優先して分配することは出来ても、「戸口制度」が廃止されない限り、社会身分制度による差別やギャップを根本的に埋めることは出来ないと思います。

●座長— ありがとうございます。



●座長— あと 20 分ほど残っております。いまのところスケジュールどおりでございます、20 分を有効に活用して議論をしてゆきたいと思います。すでにフライングで手を挙げておられる先生もおられますね。伊藤先生、どうぞお願いいたします。

●伊藤— 人類学の農民社会研究 (Peasant Studies) では、そもそも都市が形成され国家という大きな統合が成立する過程で、都市に居住する人々は統合機能をもつ人々であるとされます。統合機能をもつ人々とは、王侯貴族とか行政官、軍人、商人、聖職者、学者などで、すでにそこには学者も入っているのです。そしてその周りの農村部には生産者である農民がいるのが、都市を中心にした国家社会の基本構造でした。統合は王朝の末期には揺らいで社会が混乱したり、農民反乱が起きたりします。そうした統合の衰退期に、さきほど塚田さんが言われたように、さまざまな面で流動性が表れたりしました。

それからその統合には仲介機能も注目されます。中間に位置して統合を支えるような機能を果たす人々です。大きな社会統合に伴う矛盾やジレンマの解決を掲げて反乱や革命が起きたりして、新たな統合にいたる過程でさまざまな社会変動を経るわけで、中国におけるさまざまな人口流動もそうした結果とみることでできると思います。ともあれ社会の統合機能の中には学者も位置づけられているので、その地位にともなうジレンマを、かつての農民社会や国家社会とは異なる市民社会において、どのように克服してゆくべきかが課題となるかと思いますが、それには開発研究で言われている相互参与的アプローチ (Participatory Approach) が求められているといえます。それは要するに市民を構成するさまざまな人々が共に参与する過程を重視するもので、開発の目標や計画の立案にも共に関与するものです。これまでの開発というのは、中央から周縁に対していわば新たな支配体制を作り上げてきたのだ、という批判にこたえる上で新たな方法論的な方策として出されているものです。ここにおられる日本人の研究者の中には、秦さんのように草深い農村出身で、農村からみて都市との格差を実感してきた人は少ないかもしれません。私自身も、1970 年代の初めに韓国の田舎に住み込んでいた当時、町から一步出るや農村はほとんど真っ暗でランプ生活でした。市場まで出掛けなければ、食べ物は畑にしかありませんでした。町に出掛けようとしても、雨が降ればぬかるんで大変でした。村の建物もほとんどが木と石と土と藁で作られていました。かつて中国で言われたように、都市と農村との格差は階級といってもよいもので、それは革命を正当化するほどの大きなものでした。その点で、秦さんの気持ちと実感のこもった発言は決して特殊なものではないとおもいます。

●渡邊— 私の質問は、瀬川先生の困ったことに関係してくるのですけれども、これからの進行の問題で質問したい。というのはなぜかという、セッションの名前とテーマが違う。これからずっとそうなのです。これをどう理解したらよいのか。

秦さんは少数民族の立場で見て、南部の漢民族社会を論じている一つのセッションで発表されている。というように座長としては思いますね。しかしそうではなくて、実は秦くんの視点は、漢族の研究を押し進めていくと、そのような疑問、つまり民族の存在というのは疑問じゃないかという問題が出てきてしまうというもので、セッションのテーマと発表の意図とが逆なのです。次のセッ

セッションも逆なのではないでしょうか。座長がこのセッションのテーマに沿って発言したらいいのか、それともコメントターの立場にたってセッションを運営したらいいのか。実は発表者が全部逆なのです。だから、われわれもどのようにこの発表を受け止めたらいいのか。おまえ違反だぞと言っていいのか。それともこのセッションを壊そうとして……ちょっとそのへん、これから続きますから。どうしたらよいのでしょうか。

●**高**— 企画者としてご説明させていただきます。このままでよいと思います。今回の会は、基本的に逆の視点から、つまり漢民族研究の発表に対しては少数民族研究者、少数民族研究者の報告に対しては漢民族研究者にコメントしていただき、そして他分野の方々にコメントを求め合っていたと、というクロスオーバー的視点を求めるために企画されています。つまり、自民族社会研究を行う漢民族出身の秦先生のような視点と、少数民族社会研究を行う方の視点は果して同様であるか、あるいは同様となりうるか、その視点の共通点と相違点をどのように捉えればよいかを明らかにするために、こうしたクロスオーバー的議論も重要だと思います。もちろん、同様な研究や同地域研究を行っている研究者からコメントをいただいてもよいのです。ということで、今回は、コメントを重視するように企画いたしました。渡邊先生や参加者各位を戸惑わせてしまったかもしれませんが、ご理解いただければ幸いです。

●**渡邊**— そうですか、発表はだしとして。面白いですね。重視されているのはコメントターですか。

●**高**— はい、そうです。報告者各位には失礼かもしれませんが、たとえば、秦さんの論文や報告に対するコメントは、これまで同じ漢民族社会研究者によるものが多かったかもしれませんが、少数民族社会研究者の方々が秦さんの問題意識をどのように受け止めるか、それを明らかにするために、今回は、少数民族研究を中心に行っているお三方にコメントターを担当して頂くことになっています。このようなクロスオーバー的な議論を踏まえ、最後の総合セッションでは、新たな問題提起や学問的方法論を追及することを期待しています。

●**渡邊**— コメントが大事だということがわかりました。

●**加々美**— すみません。主催者のほうから発言させていただいて恐縮ですが、高さんからも説明がありましたが、しかし私はやはり報告者の報告を重視したいと思います。都市と農村の関係について、文革研究をやった経験から申しますと、文革資料では「少数民族の農村」を対象としたドキュメントが極めて少ないのです。文化大革命の『紅衛兵小報』、紅衛兵新聞でもほとんどそれは出てこない。私は新疆ウイグルに関する文化大革命のデータを集めて小さな論文を書きましたけれども痛切にそれを感じました。

それでいて、実は一般農村の問題自体について言えば、文革期の「小報」や「大字報」のほか、いっぱいそういう資料があります。一番衝撃的な資料でいえば、「湖南省無聯」の「湘江風雷」です。いかに農村が悲惨であるか、紅衛兵たちが下放され農村に行って、社会主義中国にかくも悲惨な現実があるのかということを初めて知ったということがあちこちに記載されています。実は、それが省無聯がのちに民主化運動に向かってゆく衝撃力になっていくわけです。

ご存じのように、70年代に入ってからの文革末期に例えば新疆に下放された多くの紅衛兵が、上海などの大都市に舞い戻ってきました。その結果彼らを食わせるためのブラックマーケットができます。なぜかといえば不法に都市に舞い戻った青年たちは都市戸籍を持たないので「糧票」が使えませんから。さっき言った戸籍の問題があつて、彼らが生きていくうえではブラックマーケットに依存するほかなかったのです。しかも、僕の理解ではそういう状況の進行が第一次天安門事件を

引き起こし、四人組を倒す強い社会的圧力になったと思っています。

結果的に当時、戸籍制度の規制を超えた大変な社会的流動性が高まり、ここで戸籍に関連して言われている社会的政治的規制が一度は崩れたことは明らかなのです。実はそれを支えていたのが、人事档案とよばれていたもので、これと戸籍がセットになって戸籍制度の力を非常に強くしていたのです。ところがその人事档案と戸籍の結合が、少なくとも文革の混乱を通じて分離された。おそらく秦さんがお育ちになったのは文革の最末期で、まだ子供さんだったと思いますが、70年代後半には再びかなり戸籍による規制が強くなってきている。その結果、農村と都市の分離によるギャップが大きくなってきている。とすれば、その問題は何なのでしょう。

塚田さんがお話になったように、58年までは「戸口」のような都市と農村を分離する厳しい規制はなかったわけです。だからこそ例えば1940年代前半期陝北の延安中共中央根拠地には吳満有のような外部から移住してきた客民で富農化した農民英雄が現れたわけです。少なくとも解放区には大量の客民がいたことは確かです。客民がいるということは、血縁・地縁で結ばれていないよそから来たものが大量にいたということです。そういった農村社会の再編成が当時は必然的におきていたということです。それが、中共が全国政権を掌握したのちも社会的流動性が持続的に高まることによって、再び革命的混乱が生まれるならば、かえって共産党権力の基盤を危うくする可能性があるということから厳格な戸籍制度が生まれ、それからさらに人事档案と結合して強固な農村・都市分離の制度が成立したというのが私の理解です。

しかしその際もっと問題なのは、少数民族の農村の状況はどうだったかという問題なのです。文革資料になぜ少数民族の農村を考察対象とした資料がほとんどないのか。実際どういう状況だったのか。改革開放後も少数民族の農村はどう変化したか。つまり文革期には少数民族の農村はアンタッチャブルだったのか。少数民族の農村は文革の動乱にもぜんぜん変動しなかったのか。そういった問題をぜひお考えになっていただきたいと思いました。

●瀬川— それでは後もうおひとかたくらい。

●田島— まず一点確認なのですが、農村と都市の違いは城里人と郷下人としてずっと伝統的にあった一方で、少数民族と漢民族の対立はここ百年くらいのことだというお話もありました。私は華夷構造の二項対立というのが漢と少数民族の二項対立とイコールだとは思いません。しかし、思わないとしてもかつて華夷の二項対立が厳然とあったということについてどのようにお考えなのか、というのが第一点です。それから第二点は、私は最近寧夏回族自治区にいて希望工程を見てきたのですが、そこでふと思ったことがあります。例えば100人の子供を彼らがサポートしています。その中の一人がたまたま大学入ったとしたら、その子は沿海地区に行けるわけですが、そうすると沿海地区に行った一人の子供はそこでエスタブリッシュメントになって、計画生育政策のもとで一人だけ子供を生みます。残りの99人は寧夏で二人も三人も生むわけです。そうすると、クモの糸みたいに一人ずつ上がっていくのだけれども、延々と貧富の格差の構造は拡大再生産されていることになりませんか。豊かになれない訳ではないけれども、そこは学歴でがんばってよということなのですが、学歴でがんばった子は戻ってこないのです。戻ってこないことは織り込み済みで、現地の共青团の人も戻ってくる必要はないといっているんですね。産業も何もないのだから戻ってきても仕方がないと言うのです。こういう諦めのもとに中国の経済というのはまわっているところがあるのかなと思います。

よく考えれば、これは国際関係も同じなのです。例えば中国の方が日本に来て働きたいと思ったところで普通の企業が歓迎するのは、例えばITの技術者であるとかで、普通の労働者ががんばろう

と思ったところで歓迎してはくれないわけです。それでもがんばって来るといふことになる、搾取されたりいじめられたりするわけです。そしていじめられた側が、犯罪のようなことをやってみたりする。これとそっくり同じ構造が今の中国にあるのです。

広東省などに行くと、例えば河南人という一種の恐慌状態をきたすようなところがある。それはもちろん言説なのですけども、ただ言説というのは馬鹿にならない。もし人の移動を完全にフリーにしまうと、先ほど西澤先生がおっしゃったような混乱が起こります。国際関係を考えるとよくわかりますが、国内移民も同じで滅茶苦茶になるわけです。そのところがよく分かっているから、何かを変えなければいけないと分かっているのだけれども、どう変えるのか、いつ変えるのか分からない。それで、知識分子は皆黙っているのではないかなと思います。

だから、それを御用学者だからこういうことはあまり言えないのだということだけでは片付けられないのではないかと、という印象をもったのですが如何でしょうか。

●瀬川— ではこれをご質問として受け付けたいのですが、時間の関係があるので。延長してよろしければ・・・。

●高— 時間の把握は座長におまかせします。

●瀬川— では権限を委ねられましたので、ロスタイムを認めます。今の問題を秦先生、お答えになれる範囲でお願いします。

●秦— 第一点目の華夷構造の二項対立が漢民族と少数民族の二項対立とイコールであるかどうかのご質問は、非常に考えさせられるご指摘だと思います。確かに、華夷構造の二項対立は必ずしも漢民族と少数民族の二項対立とイコールではありません。しかし、重複する部分があります。私見では、華と夷は歴史上、必ずしもそれぞれ漢民族と少数民族を指すのではなく、むしろ「文化」をもつ都市と、「文化」をもたない農村部・辺境地域を意味していたのではないかと思います。報告の中で、民族の概念は近代以降の舶来品であり、都市或いは「城里人」対農村または「郷下人」という二項対立の意識は、漢民族と少数民族という民族概念よりもずっと伝統的だと申し上げました。その意味では、華夷構造の二項対立は漢民族と少数民族の二項対立よりも、むしろ本報告の都市と農村の二元構造とイコールではないかと思います。

二点目の知識人が必ずしも御用学者ではないというご指摘ですが、確かに知識人といっても様々で、全てが御用学者というわけではありません。しかし、歴史上、中国の知識人の果たしてきた役割や、人類学や民族学などが導入された近代以後、応用人類学を強く主張する学者の研究姿勢を自省的に回顧すれば、中国の人類学者民族学者はやはり全体としては中華思想に染まっている傾向が依然強く見られ、その結果、中華文明を相対主義の視点から批判するよりも、むしろ政府に評価されるような「正しい学問」や「よい学者」を目指す傾向が強いのではないかと思います。報告の中でも申し上げたように、多くの人類学者は、応用人類学を「人民のための学問」だとするスローガンを掲げていますが、必ずしも「戸口制度」に見られる農民の苦難や差別問題を十分取り上げて論じてきたとは言えません。もちろん、このような難しい問題に深く取り組む作業は人類学者にとって昔から直面するジレンマですが、中国人類学が本当に目指すべき応用人類学とは、少なくとも人類学者が文化の媒介者として、人類学の知識や智恵だけではなく、『中国農民調査』の著者のような勇氣と良識と信念をもって調査研究活動に従事し、農民の生活改善に役に立つ内容をもたなければならぬと私は考えております。

●瀬川— ではもうおひとかた。櫻井先生ですか。

●櫻井— では簡潔に。私が言いたかったことは、伊藤先生と同じことなのですが、秦先生がご発

表になったことは都市と農村の構造的格差の問題ですけれども、そこに民族の視点を入れるということで、非常に新鮮です。新鮮ですけれども、大きな戸惑いもあるわけですし、私自身まだ中国の都市と農村の問題というのは、中国の社会の構造的な問題だと思っております。ですからそこにどうやって民族の視点が入るのか、少しまだよく分からないところもあります。

今まで中国の社会、農村と都市の問題というのは、伊藤先生がおっしゃるように、階級問題として捉えられてきましたし、私もそういうつもりで考えてきました。そういう社会主義の階級問題という形での社会構造の捉え方が、今まで農民だった者が、非常に経済化されて都市が主体になってきた時に、その移行する時期での生産の問題が、学者レベルであれ、現実社会のレベルであれ、まだうまく解決できていない。そういう問題として捉え、そこに民族という問題を入れていく時に、どういう有効性があるのか。これは有効性がないということではなくて、そこに民族という視点を入れた時に新しい問題提起ができるのかということが、まだ私には理解できなかったのが戸惑いがあるということです。しかし戸惑いはあるけれども刺激は受けたので、私もこれから考えていきたいと思っております。

もうひとつは、民族問題の時によく言われることなのですが、国民国家という概念です。中国では国民国家と言わないで民族国家と言いますが、そうすると民族が国民という概念の置き換えになっているとしても、国民という概念は個人が国家に属しているのであって、民族が国家に属しているわけではないのです。個人は法の下で、国家の下で平等であるというのが国民国家の考え方ですから、そういう成熟した考え方が中国にあるのなら、都市人も農民もすべて平等でなければならない。そのあたりの中国が今言う民族国家、それは我々が言うところの国民国家かも知れませんが、その国民という概念がまだ中国では不十分というか、熟していないところがあるので、もしそういう問題から都市と農村という問題を考えた時に、先ほど言った民族という新しい視点は、そこから入ることができるかもしれません。という問題提起をしたいと思っております。

●瀬川— ありがとうございます。それでは時間になりましたので、議論は尽きないと思うのですが、ここで私は座長として一言まとめます。

民族と都市／農村というこの二つの軸をどう交わせるかというところで、簡単なまとめはできませんけれども、やはり国家統合のなかのいくつかのフェイズとして捉えることはできると思います。ただし、私はここで最後のまとめを小奇麗なまとめではなく、むしろひとつのオープン・クエスションで終えたいと思います。

ひとつの巨大な国家・中国の統合原理のいくつかの側面として都市・農村というものもあれば、民族というものもあるのですが、そのなかで、我々文化人類学・民族学に携わる者が、まず中心的に追及し、着目してきたものが「民族」という視点だったわけです。この民族という視点から中国を捉えるということが、果たしてどういう意味をもつのかということをお我々は十分自覚したうえでやってきたのかどうか。ですから、そこをもう一度捉え直すということから次の展開が生まれてくるのであろうというのが私の見解ですが、そういう視点で良からうか、というのがオープン・クエスションです。

こういう締めくくりをするのは、多少座長としての任務を放棄したにも等しいのですが、最初のセッションですので、このリベンジの機会は最後の総合討論でもあるかと思っております。ですから、ここで長い笛を吹かせていただきます。ありがとうございます。